

¡Hola, amigos!

第054号

(RとNの Cádiz からの手紙)

皆さんこんにちは。これはHPというより、日本の友人・知人の皆さんに私達の近況をお知らせする手紙のようなものです。そのつもりでお読みください。

更新は、なるべく毎週、日本時間の金曜朝05:00から07:00時に実施する予定です。臨時休刊の場合は前もってお知らせするつもりです。

なお、バック・ナンバーは最近三号分のみとし、それ以前のもの順次削除します。

では、今週号へどうぞ。

2004年12月02日 カアディスにてR y N

☆今週号のトップヘジャンプ



「狭いながらも・・・」の巻

およそ何かを選択するには、マズ欠点がないかどうか注目すべし、なんでしょう。就職先やパートナーを決めるとか、家を買うとか、対象が大きくなればなるほど慎重にすべきである事は分かっているが中々そうはいかないのが世の常。

カアディスの家は、買ったのではなく借りただけですが、私達にとってはこの先そう簡単に住み替えるわけにはゆかないという意味で、買うも同然の大きい選択でした。

にもかかわらず、ドアを開けた瞬間、もうほとんど気持ちは固まっていました。あとは、大きな欠陥がないかどうかの駄目押しをしたに過ぎません。入口のドアを開けた途端、目に飛び込んだ水平線に目が眩んだのです。一目惚れですね。

住んでみるとやはり案の定色々な欠陥が判ってきます。

その一、部屋が意外に狭い。その二、隣室の音が筒抜け。その三、家具の趣味が合わない。その他私達の手で補修可能な小さい瑕疵も幾つか、まあコレは特に問題なし。見合いの席ではアラ探せ、一旦決めたら目をつぶれ、とは古人の知恵でしょうが、えてしてその逆になってしまうのも、また世の常。

欠陥一、についてはただただ水平線のせい。部屋は狭いのに窓がやたらに大きくて、窓の外にばかり目を奪われたんです。普通スペインの人達が住む家は余り窓を大きく開けてありません。それどころか南に面した壁は全部ふさがっているような建物が結構あります。特に内陸部の家を見るとその傾向が強く、しかも夏の昼、陽射しが強い間はシャッターを閉ざしているのが当たり前みたいです。

最近、やはり家探しをしていた或る知人は、不動産屋に陽当たりの悪い部屋を見せられて、ドウデスいい部屋でしょう？陽が差し込む事は絶対ありませんヨ、と言われた

と苦笑していました。日本でなら悪い冗談になるところですネ。
さすがに海や山に面したリゾート地では、窓を比較的大きく開けて一番の商品である
海や山の景観を良く見せる工夫をしています。

この部屋は特別そう言うところに配慮したと見えて窓が大きい。居間は天井から床ま
で、そして幅はほぼ一杯開いています。夏の西日がやや心配になるところ。

初冬の今、日没前は台所の奥まで陽が射します。
だから、このパセオ・マリティモに面した家はみなトルド(toldo=日除けテント)を備
えています。我が家も例外ではありません。

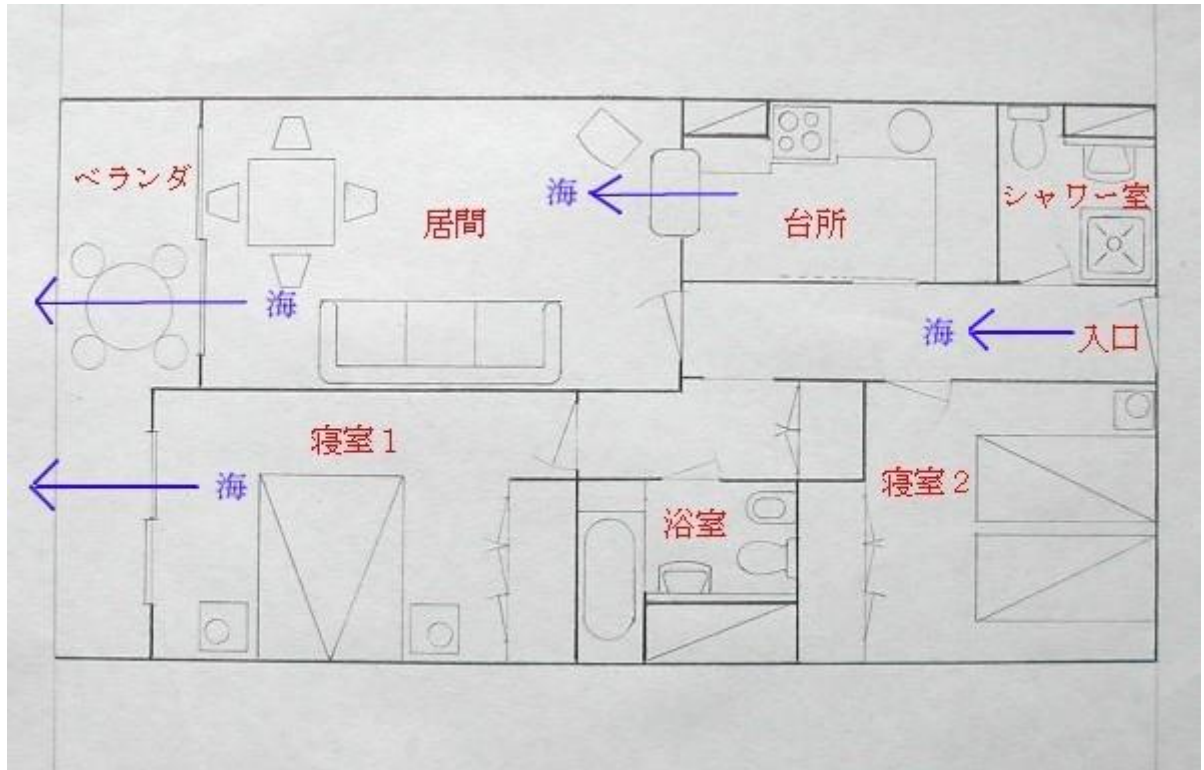


これがトルド(日除けテント)。夏の陽の高さでは敷居の中には陽は射さない筈。シャ
ッターも少しおろしてみました、換気のための穴が見えますね。テントの横棒のした
にヒラヒラする部分があったんですが、あちこち擦り切れていたもので切り取ってしま

いました。出るまでにはトルドを買い換えて返さなくてはなりません。

この窓の大きさにすっかり幻惑されたので、住み始めてから部屋の意外な狭さにやや戸惑いました。特に居間の幅が決定的に狭い。3メートルちょっとしかありません。

室内総面積は約60平米、ベランダが7.5平米というところでしょう。



間取はこんな具合。しゃれっ気のかけらもない細長い田ノ字。四箇所ある青矢印に注目して下さい。私達にとってコレがこの部屋の価値の全てです。

寝室1の窓は腰高窓、寝室2とシャワー室は通路に面しているので頭の位置より高いところに換気用の窓があります。

寝室はどうせ寝るだけだからいいとして、居間以外で狭さが目立つのは浴室とシャワー室、決して快適とはいえません。貯湯タンクの容量も充分ではありません。お出でになる予定がある方はどうぞご勘弁を。

下見の時だまされたのは、鏡。浴室のパイプ・スペースに面した壁は全面の馬鹿デカイ鏡だったんですね。だから狭い浴室も倍の広さに見えちゃうわけ。

台所も広いとはいえませんが、こじんまりとまとまって使いやすい。これは食いしん坊の二人には重要なプラス材料。居間に向って開いたカウンターがいい。調理台の下に洗濯機が納まっているのが従来の日本家屋と違います。収納スペースは持ち物の少ない私達にはまずまず充分。

調度品での一番の欠点は本棚がない、ということ。本を納めるところが全くありません。仕方なく現在鋭意製作中。道具も材料も思うに任せぬまま、苦勞して一つは作り終えたところす。更にもう一つに取り組中です。

スペインに来てからの二年間は、多分物心ついて以来のRの人生で本読むことの最も少ない日々であったと思います。これからも読書量が増えるとは到底思えませんが、それでも尚且つ平均的スペイン人よりは読んでいるんじゃないかと思ひますし、蔵書と言えるほどの物ではないにしても持っている本は回りの人より多いんじゃないかとも思ひます。

スペインの人達の実生活を知らないのにこんな事を言うのは乱暴かも知れませんが、その根拠は電車の中で本を読んでいる人を殆ど見かけないことと本屋の数が極端に少ないことです。カアディスではまだ電車にあまり乗っていませんが、ベナルマデナではそうでした。たまに車内で本を広げている人を見かけてよく見るとスペイン語じゃないんです。読んでいるのは外国人。日本じゃどうかするとバスの中でさえ読んでいる人がいますよネ。

カアディスでは小さい本屋の数は比較的多いように思ひますが、日本と比較すると絶望的に本が少ない。大手書店チェーンはあるのかどうか、少なくとも私達の気づく範囲ではありません。ベナルマデナ市立図書館の蔵書は高校の図書室程度だったし。戦国時代の武家は、読書は人間を臆病にする、と嫌ったという事を読んだ記憶があります。スペインの人達がそう考えているとは到底思えませんが。

部屋の大きさは狭い狭いといつても私達二人だけの生活には全く不便はないし、臨時のゲストにも短期間ならガマンして貰えるだろうと思ひます。

もっと広い部屋でセイセイとしたいという方は近所の四つ星にご案内する事にしましょう。勿論払いは本人持ちで・・・。

欠陥の第二、隣室の騒音ですが、集合住宅では或る程度の生活音はお互い様、ガマンするしかありません。それにしても、居間が接する方のお隣さんは余程耳が遠いのか朝三時・四時までテレビがガンガン言っています。寝室側の隣室は比較的静か。反対でなくて助かりました。

そのうちこのテレビの音の高さが二段階あることに気がつきました。低い方はテレビをつけている事は分かってても何を見ているかまでは分からない程度の大きさ、大きい方はコッチで私達が見ている音より大きいぐらいで閉口します。

まだ面と向って会ったこともなく、挨拶も交わしていませんが、どうやらお隣も退職者夫婦らしい雰囲気があります。このうちの一人、多分ジサマがかなり耳が遠いんだろうと思っています。補聴器でもプレゼントしたい。

スペインの集合住宅の構造は、地震国ニッポンで育った者にはどうしても不安なくらい簡単です。建築中の建物を見たら到底買う気にはならない安直さです。出来上がりのミバの良さはたいしたもんですけどね。

鉄筋が入っているのは要所要所の柱と各階の床部分だけ。ビルを建てているところを見ると、まず柱を立ててその上に床を造り、また柱を立てての繰り返し、言い換えるとテーブルを何段も積み重ねたようなもの。この時点では壁はありません。

外壁と間仕切壁は後で穴明きレンガを積んで造ります。壁の強度は殆ど期待できないんじゃないでしょうか。素人目にも、こんな構造でよく建築許可が出るなあと思うくらいですが、どの工事現場を見ても同じですからコレが地震のないスペインの「当たり前」なのでしょう。同じスペインでも北のガリシア地方では重厚な石壁の建物が多かったと思います。日本でもこんな安直な工法があるんでしょうか・・・？

強度計算はともかく、問題はこの穴明きレンガを積んで造る壁なんです。壁の中に無数の小さな空気のカプセルがあるわけと言わば中空の壁ですから、断熱効果は高いのですが、音は筒抜け。

いったいに、この国の人には騒音をあまり気にしないのではないかと、自分の出す音も周囲の人の出す音も一切お構いなしという感じですか。バスや電車の中での携帯電話もオ

シャベリも周囲の音に負けまいと一段と声を張り上げているようです。
だから、テレビの音なんか勿論頓着ナシ。まあ、反面こちらも気楽だといえば気楽。

この安直な壁はそれなりにメリットもあって、間取の変更も改造も自由自在です。
地上階だけが商店・事務所で上は住宅という市街地のビルは、地上階はテナントが決まるまでレンガの壁でふさがっていますが、ある日突然壁をぶち抜いて内装工事が始まります。壁は強力メンバーではないから、何処をどうぶち抜こうが問題ないのでしょう。ドア一用の開口だろうが大きい窓だろうが又は壁全部を取っちゃってもOK。

住宅だって、中古で買った人が間取を変えなくなったら、いとも簡単に壁をトッパラッテ別の場所に新しくレンガの積み木をするらしい。ダカラかどうか、私達の賃貸契約書には真っ先に「改造はダメよ」という条項がありました。

欠陥の第三。調度品の趣味については家具付きを選択した私達もそれを覚悟でいたわけですから仕方ありません。はじめから家具付きで貸す気なら、出来れば実用一点張りの調度で統一して欲しかった。ベナルマデナのオテル・アパルタメントはそういう配慮からか無骨な実用品ばかりでした。

この部屋の家主、多分60台どん詰まりの老婦人は近所にあるカーデイスでは一、二という評判のブティックのオーナーなんだそうです。

契約書のサインで会った時は普段着でしたがそれでもシッカリお化粧をして身綺麗にしました。店に出ている時は派手な化粧とトップモードに実を固め、遠目には40台の女性かと思間違えてしまいます。デヴィ夫人をしぼませたらこうなるかというムード。初めは彼女の趣味が色濃く出た部屋でした。バサマの少女趣味。其のたぐいの小さいものは全て天袋にオクラ。住むほどに段々我が家の雰囲気になってきて、壁のわけのワカラン絵数枚にとって代わったのは地図や海図や数字だけの3ヶ月カレンダー。N曰く、なんだか運送屋の事務所になっちゃったみたいだネ。

まあ、欠陥も色々ありますが、全て許そう、我慢しよう。何しろ広い水平線とそこに沈む夕日を毎日眺められるんだから。部屋の中には目をつぶって外を見よう。***
★再刊早々ですが、来週12月9日号は臨時休刊とさせていただきます、悪しからず。★

「ポヨ・アウマード」の巻

ポヨ(pollo)はひな鶏、若鶏。アウマード(ahumado)は燻製。何のコターないトリの燻製です。ポヨには外に俗語では若造とかずる賢い男なんていう意味もあって、そういうところも英語のチキンに通じる言葉です。

街のアチコチにはアサドル(asador)という店があつて、若鶏を6～7羽並べて突き刺した横棒が上下に5段ほどついたロースト・チキンを焼く道具を備えています。焼くのはポヨ・アサード(pollo asado=ロースト・チキン)だけでなくコストィーヤ(costilla=豚のアバラ骨付きの肉)なども焼いています。大きな店はこの機械が2台も3台もあつてそれが何十羽ものトリを一斉にぐるぐる回しているのは壮観です。

特に日曜の昼食前などには店の前に大勢の行列が出来ています。

店によって、トリの中に色々な香草を詰め込んで焼いたり、それぞれ独特のソースを掛けまわして焼いたり工夫があるのでしょう。混んでいる店とそうでない店と格段の差があります。味の差はともかく、焼きたてのポヨ・アサードもコストィーヤもそれなりに美味しいものですが、焼きながら油は落ちるとは言えやはり当然油ッ気はカナリ残ります。そして、一番の問題はそのボリューム。今の私達の胃袋では一羽のトリを三回に分けて食べないといけません。私達はもう限りなくベジタリアンですからね。だから、最初の三分の一は美味しく食べられても残りは冷凍保存。二回目三回目は解凍したのを焼きなおしですから旨さも半減。

燻製器が欲しいなあーと思っていました。私達は東急ハンズで買った小さな燻製器を愛用していました。台所のガス・レンジに乗つけて使う物ですから、大掛かりなことは出来ませんが、トリモモなどは格好の材料でした。燻製にすると解凍して焼きなお

しても酷く味が落ちる事はないようです。外によく使った材料は各種干物、塩鮭、塩鯖、ハム・ソーセージ、チーズ等など。変わったところではハンペンも・・・。
安物材料も燻すことで大きく化けます。燻煙材もチェリー・ヒッコリー・櫛・リンゴの木など色々。スペインに来てから燻製器がどこかにないか気を付けていましたが見当りませんでした。大体燻製というのは元来寒い国のもののようなのですね。スペインでも北へ行けばあるのかも知れない。燻製器に限らず、なかなか私達の「欲しいもの」
がみつからないのです。東急ハンズをソックリ持ってきたくらい。
カアディスへ引っ越してまもなく、いいものを見つけました。ソレが冒頭のポヨ・アウマードなんです。



キロ当たり6.05ユーロ、コレは小ぶりの960グラムですから、5.81ユーロ。
これ、二人で三回ですから安いもんですね。しかも美味しい。皮の油も落ちきってパ
リパリ。焼きなおしても殆ど味落ちはありません。
これを見つけたのは、大手デパート直営のスーパーです。デパートと同じビルにあり

この店へ行くのが目下私達のショッピングの一番の楽しみです。

他のスーパーより多少高目ですがいい品物が多く、ここが肝心ですが、よく探すと安くて良いものもあり、又は本来は高いものがオフelta(お買い得)ということも。ワインも飛びきりピンから私達の守備範囲まで豊富に揃っています。往復6キロ弱で散歩の距離としても適当。但し、デパートの売り場は横目で睨んで通過です。***

(カァディス散策・その二)

「プラヤ・ビクトリア」の巻

前号に続いて私達の散歩道です。海岸遊歩道と来れば、次は当然ここ、海岸そのもの広い砂浜です。プラヤ(playa)です。第51号(再刊第1号)のカァディス半島の地図を思い出してください。カマキリのような形の胴体部分が新市街ですがその背中、即ち外海側で半島の付け根に近い方の浜をプラヤ・ビクトリア(Playa Victoria)と呼びます。全長約3キロ。前号のパセオ・マリティモは全面この浜に沿っています。

ここは夏の間は海水浴場として賑わいますが、年間を通じて市民の運動の場所にもなっています。前にも言いましたが、砂粒がとても細かいので、潮が引いた後の濡れた浜は歩いてみても殆ど足跡がつかないくらい固く締まっています。そうは言っても砂浜は砂浜ですから、遊歩道の舗道の固さではなくエクササイズ・ウォーキングやジョギングにも最適です。ビーチ・サッカーも盛んです。

朝から夜遅くまで、無人になることは殆どありません。暗くなってからでも遊歩道からの灯りが届くので歩くのに不自由しないからです。

また、これも前号で言いましたがこの浜の沖は遠浅で、しかも一旦深くなってから、ずっと沖で再び浅くなっていて、その部分が水面下で天然の防波堤になっています。ですからいわゆるヨタ波が来る心配も殆どないんです。この一ヶ月半余り、時化の後も含めてソレらしき危険な波は見たことがありません。

市民の運動の場所、といましたが憩いの場所でもあり、もうヨソでは冬支度だというのに乾いた砂の上では水着で(又はトップレスで!)甲羅干しをする人アリ、椅子持参でお茶する人アリ、楽しみ方も様々。普段はリードにつながれて散歩のワン君たちもここではリードを外してもらってセイセイと駆け回っています。本当にこの浜を一番喜んでいるのは彼らかも知れません。12月になった今もたまには泳いでいる物好きもいます。では、ウチの前浜の朝の顔から夜までをご覧ください。



エブ・タイド。早朝の引き潮。まだ日の出前、広い浜はかもめが独り占め。



誰が書いたか、砂に書いたラブ・レター(古い!)。昨夜、新しい恋人が出来たか、はたまたフラれたか。テ・キエロ(te quiero)とは書いてないのがおかしい。



日の出直後、浜のお客様第一号。チビ犬の影もナガーク。



陽は高くなり、人も出てきた昼下り。ソレも、もうすぐシエスタで又無人に。



土日の浜は散歩の人達だけでなく、ビーチ・サッカーもアチコチで・・・。



たそがれ。左端の灯台はカスティージョ・サン・セバスチャン。右端は四つ星、その名もホテル・プラヤ・ビクトリア (Hotel Playa Victoria)。



深夜。遊歩道からの灯りで歩くには充分。こんな具合に早朝から深夜まで夫々に楽しめます。カアデイスは紀元前11世紀頃既にフェニキア人によって港として機能していたのだそうです。その後ローマ人によって更に築造・整備されたのでしょう。

博物館で古い図面などを見ると、例のカマキリの胴体部分は殆ど何もなくて頭の部分だけが島のようになっています。半島の先端部だけが岩礁地帯でそこまで砂嘴が伸び

ていたのだと思います。その頃の形が別名「銀の匙」の所以でしょう。

その先端部・スプーンの頭(カマキリの頭)がカスコ・アンティグオ(casco antiguo)と呼ばれる旧市街です。その後段々スプーンの柄の部分が築造されて太くなりスプーンから現在のカマキリ型に発展してきたのでしょう。

この完全な人工的半島には自然がありません。古い広場や公園はありますがそれはあくまで人工のもの、本当の自然の緑地は皆無です。半島全体が人工島のようなものですから仕方がありません。そういう土地で唯一自然と呼べるのはやはり浜辺です。

市民にとってこの浜は貴重な貴重な自然そのものです。

最近、浜に「犬はダメ」という立て札が沢山立ちました。犬の糞を始末しない不届き者がいるからですが、犬はダメ、と言う前に「始末をしろ」と何故言えないのでしょうか。管理者の発想は洋の東西を問わず。少数の不心得者を指導するより全部ダメと禁止しちまう方が楽なわけ。毎日犬と散歩に来る人達はみんな立て札なんか無視してるらしいのが救いですが、犬が聞いたら人間の勝手を怒るでしょうネ。***
